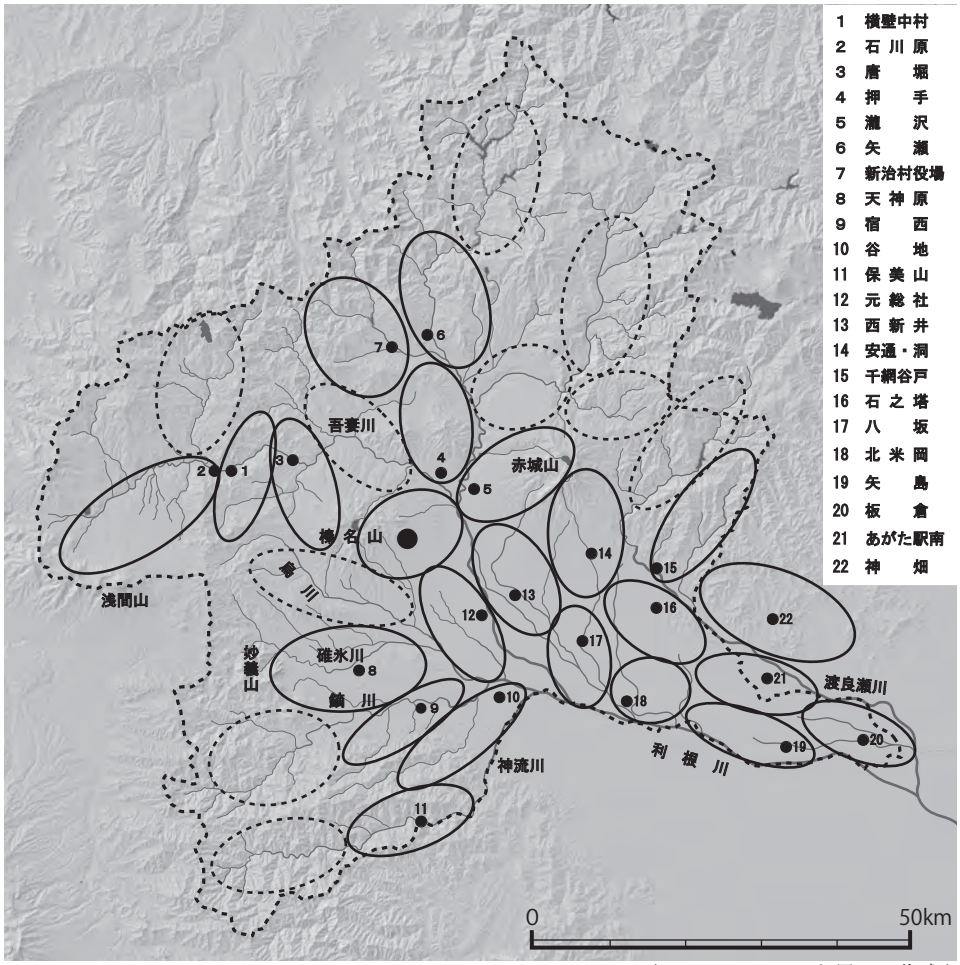
縄文時代晩期の遺跡テリトリーと居住人口について

大工原　　豊

１．群馬地域の遺跡テリトリー

これまでの研究成果により、縄文時代の集落の活動領域（遺跡テリトリー）は半径４～10㎞と想定されている。(註1) そこで茅野遺跡の盛行期に当たる晩期前葉の群馬地域の遺跡テリトリーについて検討してみたい。まず主要遺跡の位置を地形図に示した。そして各遺跡のテリトリーが重ならないように楕円を描き、それぞれの遺跡テリトリー想定することにした。この方法はティーセン多角形による分析に準じたものである。ただし、河川や丘陵などの自然障壁がある場合には、それを考慮して境界を想定することにした。その結果図４-14のようにこの地域の遺跡テリトリーを想定した。23遺跡テリトリーが描け、空白部分にはさらに10遺跡テリトリーの存在が想定された。各遺跡のテリトリーは、長半径７～12㎞、短半径３～6.5㎞の楕円形であり、平均領域面積は127.6㎢であった。また、茅野遺跡は長半径7.5㎞×短半径5.5㎞の楕円で、領域面積は129.5㎢と計算された。これらの遺跡テリトリーは等質のものではなく、遺跡ごとに資源開発力や居住人口に差異が存在していたことがうかがえる。また、平野部では遺跡がほぼ同じ間隔で分布しているため、テリトリーの面積もほぼ一定であるが、山間地ではより広い領域をテリトリーとしていたと推定される。また、遺跡間に大きな河川が存在する場合や、背後に



（カシミール３Ｄを用いて作成）

図４-14　縄文晩期前葉の主要遺跡と遺跡テリトリー

広い山地を抱える場合には、遺跡がテリトリーの中心から大きく偏った位置に存在していたようである。

縄文時代における遺跡テリトリーの大きさは、文化的発展により徐々に縮小されていったと考えられる。前期後葉の中野谷松原遺跡（安中市）の場合、テリトリーは半径10km、領域面積は314㎢であったのに対し、晩期前葉では130㎢と40％程度に領域面積が縮小している。これは領域内の食料生産や資源開発がより効率的に行われるようになっていたことを示すものである。

２．居住人口の推定

茅野遺跡では一辺５～６ｍの正方形の住居址であり、ほぼ等間隔に３軒以上が列状に配列する集落構造であったことが判明している。住居址群はさらに調査区外まで延びているので、おそらく５～６軒が同時併存していたと推定される。そして、これを関野克の住居の居住人数の公式（関野 1938　ｎ＝（A−３）／３（ただしｎ：居住人数、Ａ：住居床面積）に当てはめて計算すると、１軒の居住人数は７～11人となる。ゆえに、茅野遺跡の居住人口は35～66人と計算される。これは前期中葉～後葉の拠点集落である中野谷松原遺跡の居住人数とほぼ同じである（大工原 1998ｂ）。

従来、単純に遺跡数や住居数で晩期には人口が大幅に減少したとされてきた（小山 1984等）。しかし、この推計には多くの問題点が存在する。まず、晩期には定住性が高まり居住地が固定化するので、移動頻度の高かった時期より遺跡数は減少する。また、定住化により住居が同じ場所で繰り返し構築されているので、住居数を少なくカウントしてしまう。そして、個々の住居規模はそれまでよりも大きいので、１軒当たりの居住人数も多い。さらに、これまで観てきたように同時併存する集落密度も高いのである。

こうした諸条件を加味して推計すると、群馬地域には茅野遺跡と同様な遺跡が32カ所（栃木県の１遺跡を除く）存在するので、当期の群馬地域の人口は1,120～2,112人と算出される。これに対し、中野谷松原遺跡の試算では前期中葉～後葉の集落の居住人数は40～60人であった。そして、この時期には半径10kmの遺跡テリトリーと推定され、石器石材の違いから群馬地域には９つのエリアが存在している（大工原 2008）。これらが同時併存する遺跡数とすると、群馬地域の前期中葉～後葉の人口は360～540人と推計される。したがって、晩期前葉には前期後葉の３～４倍に増加していることになり、少なくとも群馬地域では、晩期に大幅に人口が減少する現象を確認することはできない。全国規模でこうした分析を累積させて縄文時代の人口を推計すると、これまでとは異なる縄文社会像が見えてくる。

註

1　活動領域について、赤沢威は「遺跡テリトリー」という概念でとらえ「その遺跡に居住していた集団が日常的に食料など各種資源を調達していた領域であり、それは明確に閉じた系を意味している」と定義する（赤沢 1983）。そして、その領域は未開社会の民族事例から半径10kmないし歩行時間２時間の範囲とされている。また、縄文時代の遺跡テリトリーについては、海産資源の獲得状況を用いた冬木貝塚のテリトリー研究（赤沢・小宮 1981）や、新田野貝塚のテリトリー研究（赤沢 前掲）がある。また、内陸部においては、能登健による吾妻川流域における酸性河川と石鏃出土遺跡の在り方から遺跡テリトリーを検討した研究（能登 1985）がある。また、筆者らは前期の大下原遺跡・中野谷松原遺跡に搬入される石器石材の入手場所から集団の活動領域の研究を行っている（磯貝・大工原 1993、磯貝 1994、大工原 1998ａ、磯貝 1998）。これらの研究では半径10kmの遺跡テリトリーは妥当な範囲と結論付けている。しかし、武蔵野台地の中期の遺跡の分布からティーセン多角形を応用した分析を行い、領域の範囲を半径4.48kmと導き出している（谷口 1993・2005）。縄文中期の武蔵野台地のように定住性の時期・地域では、遺跡テリトリーは民族誌の事例よりもはるかに狭い。また、林謙作は石巻湾周辺の後・晩期の遺跡を分析し、遺跡間の距離は４～6.5kmしか離れていないが、これは海に各遺跡の領域が広がっていたことによることを明らかにしている（林 1986）。

引用・参考文献

赤沢　威・小宮　猛　1981　『別冊　冬木貝塚産魚種組成と漁撈活動』茨城県教育財団

赤沢　威　1983　『狩猟採集民の考古学』海鳴社

磯貝基一・大工原豊　1993　「石器石材の分析」『大下原遺跡・吉田原遺跡』安中市教育委員会，pp.244-254

磯貝基一　1994　「石器石材の分析安山岩製石器石材について」『中野谷地区遺跡群自然科学編』安中市教育委員会，pp.103-110

磯貝基一　1998　「直接打撃系列（Ｂ類）の石器石材について」『中野谷松原遺跡―縄文時代遺物本文編―』安中市教育委員会，pp.608-611

今村啓爾　2008　「縄文時代の人口動態」『縄文時代の考古学』10，同成社，pp.63-73

可児通宏　1993　「セトルメント・システム」『季刊考古学』44，雄山閣，pp.77-81

小泉清隆　1985　「古人口論」『岩波講座　日本考古学』２，岩波書店，pp.213-245

小山修三　1984　『縄文時代-コンピュータ―考古学による復元―』中央公論社

関野　克　1938　「埼玉県上福岡村縄紋前期住居址と竪穴住居の系統に就いて」『人類学雑誌』53-８

大工原豊　1998ａ　「中野谷松原遺跡の活動領域について」『中野谷松原遺跡―縄文時代遺物本文編―』安中市教育委員会，pp.578-586

大工原豊　1998ｂ　「縄文時代の集落の景観復元」『中野谷松原遺跡―縄文時代遺物本文編―』安中市教育委員会，pp.549-578

大工原豊　2008　『縄文石器研究序論』六一書房

谷口康浩　1993　「縄文時代集落の領域」『季刊考古学』44，雄山閣，pp.67-71

谷口康浩　2005　『環状集落と縄文社会構造』学生社

角田真也　2010　「関東地方における〈土版・岩版〉研究の前提―群馬県の白色凝灰岩産地とその意味―」『國學院大學考古学資料館紀要』26，國學院大學考古学資料館，pp.97-121

中村　大　2018　「縄文時代の人口を推定する新たな方法」『環太平洋文明研究』２，pp.39-58

能登　健　1985　「魚の棲まない川」『郷原遺跡』吾妻町教育委員会，pp.43-52

林　謙作　1986　「亀ヶ岡と遠賀川」『岩波講座　日本考古学』５，岩波書店，pp.93-124